
日本図書館文化史研究会
ニューズレター

第90号 2004年11月8日

日本図書館文化史研究会

〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
明治大学司書・司書教諭課程
郵便振替口座 00170-5-164973

(事務局)

小黑浩司

ファックス

電子メール oguro@sakushin-u.ac.jp

■■ 目 次 ■■

2004年度研究集会・総会、盛会裏に終了	2
『予稿集』頒布のお知らせ	
創立25周年記念事業の実施について(案)	3
『図書館文化史研究』第22号原稿募集のお知らせ	
日本図書館文化史研究会2004年度第2回研究例会のご案内	4
『図書館文化史研究』第21号が刊行されました	
2004年度研究集会特別講演・シンポジウム報告要旨	7
2004年度研究集会個人発表要旨	9
『ニューズレター』原稿募集のお知らせ	
研究例会発表募集のお知らせ	
昔の帝大図書館(続)ーその閲覧・貸出サービスー(田澤 恭二)	11
藤島隆『北海道図書館史新聞資料集成 明治・大正期』で調べる 書評に代えて (奥泉 和久)	13
運営委員会通信	15
事務局だより	16
会費納入のお願い	
会員動向	

2004 年度研究集会・総会、盛会裏に終了

2004 年度日本図書館文化史研究会研究集会・総会は、9 月 11・12 日の両日、京都精華大学を会場に開催されました。今回の研究集会・総会には、昨年の研究集会・総会をさらに上回る、66 名が参加する盛会となりました。そのうち非会員が 35 名と、会員以上の参加があったことが、今回の特徴でした。

今年度の研究集会・総会の開催に際し、田口瑛子氏、深井耀子氏に大変お世話になりました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。また京都精華大学から多額の補助を頂戴しました。重ねて御礼申し上げます。

さて、今回の研究集会・総会はじつに多彩な内容となりました。第 1 日の午前中には、京都精華大学情報館の見学が行われ、30 名が参加しました。

午後にはまず、河井弘志氏の「図書館史と図書館思想史と図書館学史」と題する特別講演が実施されました。この講演の要旨は 7 ページをご覧ください。またこの講演につきましては『図書館文化史研究』第 22 号に掲載の予定です。

続いて、「戦後公共図書館実践の再検証」をテーマに、シンポジウムが催されました。奥泉和久氏の司会・進行のもと、塩見昇氏、伊藤昭治氏、石塚栄二氏の順に報告がなされ、その後フロアの参加者も交えた討議が行われました。各報告者の報告要旨は 7～8 ページをご覧ください。またこのシンポジウムの模様につきましても、『図書館文化史研究』第 22 号に掲載の予定です。

シンポジウム終了後、京都精華大学学生食堂を会場に、懇親会が実施されました。この懇親会も 33 名の参加者を得て、大いに盛り上がりました。

第 2 日は個人発表 3 件が行われました。各発表の要旨は 9～10 ページをご覧ください。なお、個人発表は 4 件を予定していましたが、前田稔氏が急病のため発表を中止し、その時間に会員総会を繰り上げて実施しました。

会員総会では、寺田光孝氏を議長に選出し、事務局より 2003 年度の活動・決算報告と、2004 年度予算（案）が提案され、それぞれ承認されました。次いで創立 25 周年記念事業と、2005-2007 年度運営体制が協議されました。なお、25 周年記念事業については、次ページの記事をご覧ください。（事務局 小黒記）

『予稿集』頒布のお知らせ

今回の研究集会・総会の『予稿集』を、実費（560 円）にて頒布します（A4 版・本文 45 ページ）。

郵送ご希望の場合、送料（210 円）を加えた、合計 770 円をそえて（郵券可）、送り先の郵便番号・住所・氏名を明記して、事務局まで申込んでください。

創立 25 周年記念事業の実施について（案）

本研究会は、きたる 2007 年に創立 25 周年を迎えます。運営委員会では、以下のような記念事業の実施を計画し、先の会員総会に諮りました。審議の結果、記念事業の実施が了承され、運営委員会で引き続きその内容等について、検討を進めることになりました。

記念事業の内容等につきまして、会員の皆様からのご意見・ご要望などをお待ちしています。ご意見等を事務局までお寄せください。

- 『図書館文化史研究』第 24 号（2007 年 9 月頃発行予定）を「創立 25 周年記念号」として、増ページ発行する
 - ・ 「論文集」とし、「随想」類は掲載しない
 - ・ 特集テーマを設定し、公募と同時に主要な会員に執筆を打診する
 - ・ 多数の論文が集まった場合、単行本として刊行する
- テーマ例
 - * 図書館サービスの歴史
 - * 図書館人物伝
- 名誉会員の推挙
 - ・ 小川徹氏、河井弘志氏を名誉会員に推挙する
- 創立 25 周年記念研究集会の開催
 - ・ 関東地区での開催を予定
- 以上の創立 25 周年記念研究事業の経費については、研究会予算・決算の繰越金より支出する。

『図書館文化史研究』第 22 号原稿募集のお知らせ

機関誌『図書館文化史研究』第 22 号の原稿を募集中です。

原稿の締切は 2004 年 12 月末日です。ふるってご投稿ください。

なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は別記事務局までお願いいたします。

日本図書館文化史研究会 2004 年度第 2 回研究例会のご案内

2004 年度第 2 回の研究例会を、下記のように開催します。会場は第 1 回と同様に明治大学です。是非ともご参加ください。

なお例会・運営委員会終了後、会場近辺での交流会の開催を予定しています。あわせてご参加ください。

記

- 日 時 12 月 11 日 (土) 14 時～16 時
- 場 所 明治大学 アカデミーコモン 8 階 A-9 会議室
※ アカデミーコモンの位置、また交通等は 6 ページ掲載の地図
をご参照ください。
- 参加費 無料
- 申込方法 参加ご希望の方は、本研究会事務局まで、郵便、ファックス、または電子メールでお申込ください。
- 申込締切 12 月 5 日 (必着) をお願いします。
- 内 容

【発表 1】

- 発表者

宮原 志津子 (東京大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室博士課程)

- 発表題名

東南アジアの公共図書館における情報サービスの進展

- 発表要旨

日本の公共図書館は近年、貸出を中心としたサービスから「地域の情報基盤」として IT を利用したサービスのあり方が模索されているが、それは東南アジア諸国においても同様である。国の経済状況や図書館の歴史的経緯によってそれぞれサービスのあり方や進捗状況は異なるものの、インターネットを利用したサービスや、司書業務をより情報サービスに集約させるために業務の機械化を進めるなど、図書館の新たな役割を認識し、新しいサービスを積極的に取り入れようと努めている。本発表では現地調査の結果を交えながら、シンガポールを中心とした東南アジアの数カ国の図書館の概要を紹介するとともに、国立図書館や公共図書館において情報サービスが今日どのように進展しているのかについて発表する。

【発表2】

- 発表者

松本 直樹（東京大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室）

- 発表題名

埼玉県内公立図書館にみる施策の波及

- 発表要旨

公立図書館は社会の変化にともない、新規施策を検討し、既存サービスを改善する必要がある。その場合、自らの図書館が置かれた環境や自治体内のさまざまな要因を勘案すると同時に、周辺自治体、県立図書館等の動向も確認する。このように、図書館員が自治体外部の情報を参照、収集するのは、施策形成に必然的ともなう不確実性を軽減するためと考えられる。先進自治体や同規模自治体、県立図書館における取り組みの情報は、そうした不確実性を低下させ、施策案の決定、そして合意調達を容易にするのである。本発表では、県立図書館を中心に実施された過去の研修会、研究会等に焦点を当て、そこでの情報共有が、公立図書館への施策波及にどのような影響があったかを検討する。分析の対象は埼玉県内の公立図書館である。

『図書館文化史研究』第21号が刊行されました

機関誌『図書館文化史研究』第21号が、9月に刊行されました（本文：83ページ、本体価格：1,900円）。

会員の皆さまには、9月初旬に発送済みです。未着の方は恐れ入りますが、事務局までご連絡ください。

『図書館文化史研究』第20号 目次

●シンポジウム●

基調講演 レファレンスサービスの連続性と断絶 日本図書館文化史研究会 2003年度研究集会・総会 田村 俊作

●論文●

ライヴアルは百貨店 : 1912年の図書館 高梨 彰
国立国会図書館長としての金森徳次郎 鈴木 宏宗

●史料紹介●

東京、南品川に明治25年に設立された品川書籍館のこと 小川 徹

会場案内

2004 年度研究集会特別講演・シンポジウム報告要旨

特別講演

河井 弘志

● 講演題名

図書館史と図書館思想史と図書館学史

● 要旨

図書館史は図書館の史実の記述であり、図書館の発生・変化の歴史だけでなく、衰退・滅亡の歴史の研究も必要である。図書館成立過程の批判的研究、図書館運動史、図書館関係人物史、蔵書史、精神史・社会史などにも研究成果がみられる。図書館にかんする思想や図書館学も図書館の史実を変えていく力となるので、その研究も重要である。ドイツの図書館学は、図書館員が専門職となるにつれて、彼らによる著作が多くなった。分類理論における論争は、分類の基本原理に直接とりくむ論争であり、分析的分類法と合成的分類法との根源的な対立を明らかにした意義は大きい。その後の研究者はこの基本問題を素通りしている。図書館思想史においては、何を思想とみなすかが問われる。思想はあいまいさを特性とするといわれるが、思想には価値志向性が必要であること、主体を導く規範となるものでなければならない。ドイツの公共図書館思想をみると、彼らの所属した社会階層が思想に反映していることがわかる。歴史の根源力は社会経済的な下部構造であるが、図書館の創造や発展に向かうためには、思想の力が介在しなければならない。図書館史を忠実に記述するためには、どうしても図書館の思想や理論を跡づけなければならない。

シンポジウム

【報告1】 戦後図書館実践の展開についての史的考察

塩見 昇

戦後公共図書館サービスの理論と実践の展開を、次の4つの時期に分けて概観した。①敗戦から1950年代の模索期、②活動の指針を見だしその共有に向けての60年代から70年、③図書館づくりが進む70年代から80年代初め、④80年代半ば以降の低成長下の図書館づくり。この間の図書館活動の変革をもたらしたのは、①図書館員自身の内発的努力、②住民要求としての図書館づくり、③疎外された当事者からの権利としての要求、④高度成長下の自治体行政、がそれぞれ相互に作用しあった。その中で「図書館づくり」という視点を共有したことが大きな成果であり、いま論議のある『市民の図書館』評価も、その文脈で変革の指針として把握することが重要だ。それにしても、このところの「人」の状況の悪さは、今後の展開をみる上で非常に厳しい情勢にある。

【報告2】 レファレンス・サービスの模索と実践

伊藤 昭治

戦後、志賀嘉九郎が「図書館を市民に根付かせるために目指したレファレンスは、どのようなものであったか」「具体的にどのような活動をしていったか」また「“レファレンスを重視したことは、逆に市民から遊離する結果になった”という批判は的確なのか」「レファレンス衰退の原因は何であったか」等々を体験に基づいて報告した。

特にレファレンス批判の論議には、当時の図書館の現状を正確に知ることが大切であり、それを無視した議論には、私は違和感を持つ。そこで認識しておかねばならない当時の図書館の現場の状況と館界の動向を加えて話題にした。

【報告3】 戦後公共図書館発展の背景

石塚 栄二

1 自動車文庫の普及と変質

65年に日野市立図書館がBMサービスからその活動を開始したことに関連して、その前段階からのBMサービスの状況をたどり、府県立図書館のBM活動の終熄を明らかにし、かつ府県立と市町村立のBMの貸出方式の違いを指摘した。

2 子どもを対象とする読書運動

60年に鹿児島県立図書館で開始した「母と子の20分間読書運動」が親子読書運動として全国に普及し、さらに65年の石井桃子さんの『子どもの図書館』刊行に励まされて誕生した文庫運動と結びつき、住民の児童サービス充実要求、図書館設置運動へと発展した。その意味でこの運動は再評価されるべきである。

3 中小レポートに始まる図書館の発展

初期に、中小レポート委員会をリードした森博氏の「その地域社会が、なにを要求するかによって、それぞれの図書館の任務がきまる」という発言は、地域条件によって図書館の多様性を認める方向を指向していたのか、それとも、理念よりも実証を追及せよとの主張なのか。彼の中途辞任が、中小レポートの方向を決定づけたのではないか。

4 自由宣言の改訂

改訂宣言は、主語を「図書館人」から「図書館」に変えたのは、図書館サービスが館という組織体によって提供される日常的な活動によるという認識に基づくものと理解すべきであろう。しかし、その後も問題が起こるたびに、しばしばその問題に係わった職員個人の行動がクローズアップされてきたことは、遺憾である。主語の変更の意義が、まだ十分に定着していないのではないか。

2004 年度研究集会個人発表要旨

【発表1】

滝野 晶子 (玉川大学通信教育学部学生)

- 発表題名

20世紀初頭のドイツの図書館と女性

- 発表要旨

女性図書館員発生の社会的背景を述べ、彼女たちに求められた能力や支払われた給料などや、「図書館で働く女性の協会」について描き出すことで、当時の女性図書館員の姿を浮かび上がらせた。ドイツの図書館史の中では、あまり多くの影響力を持っていないように見える当時の女性図書館員と「図書館で働く女性の協会」だった。だが、当時のブルジョア女性運動全体からみると、情報職として利用者にエンパワメントを与えるということをしていただのではないかと考えられる。

【発表2】

志保田 務 (桃山学院大学)

- 発表題名

間宮不二雄と『図書館雑誌』、『圀研究』

- 発表要旨

間宮不二雄(1890-1970)は青年図書館員聯盟の主宰者で、同聯盟編『NCR1942[年版]』、もり・きよし編『NDC』、加藤宗厚編『NSH』という、整理の三大ツールの成立を主導した。間宮不二雄に対する館界の評価は、図書館関係の用品商人、出版者というところにおかれ、「外から図書館を愛した人」などと表現されている*。

しかし本稿は間宮不二雄が書館学史上で本格的に評価されるべき存在と考える。理由は、彼が請われて大正末年から昭和初頭(1926-1928)に『図書館雑誌』(JLA 1907年発刊)の「編集」を引き受け、瞬時に誌面改良案を出し、学術性の高い論文を引き出して図書館学論文の開発に画期性を発揮したことにある。因みに間宮不二雄が担当する以前の『図書館雑誌』は地位の高い者の随筆を軸としていた。次に間宮不二雄が任を解かれて後の『図書館雑誌』の誌面と、彼が新たに主導した『圀研究』(1928年1月創刊)の記事内容を比較し、『圀研究』における高質性を把握した。これらを通じて間宮不二雄の学術的水準の高さを確認する。

*もり・きよし「外から図書館を愛した人 間宮不二雄」『図書館を育てた人々；日本編 I』日本図書館協会 1983.6 p.132-138

【発表3】

ピーター・ヴォドセク (Peter Vodosek) (シュトゥットガルト専門大学)

翻訳発表：佐橋 恭子（京都大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室）
金城まりえ（京都ドイツ文化センター）

● 発表題名

ドイツの図書館史研究：現状分析

● 発表要旨

ドイツ図書館史は、講座や教授職が廃止されたり、DFG の助成した大掛かりな研究プログラムが中止されたりと高等教育や研究の場で、その存在が軽視されている状況にある。ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会は発足以来、「研究志向」を重視して主題を選び、大会やセミナー、シンポジウムを定期的に開催してドイツの図書館史を支え発展させてきた。様々な国際団体との共同研究も行い、活動成果はシリーズとして出版している。歴史的テーマへの関心の高まりとともに、図書館史研究の重要性が再び大学において存在感を増すであろうと楽観視もできる。研究に留まらず、「未来は起源を必要とする」という意味で、己の職の起源を熟考する図書館員が求められてもいるのである。

『ニューズレター』原稿募集のお知らせ

ニューズレターの原稿を常時受け付けています。

次号（91号）掲載を希望される場合、2005年1月末日までに別記事務局まで原稿をご送付ください。

今後ニューズレターで、図書館文化史研究に関わる文献・情報を速報していきたいと思えます。会員・非会員の問わず、関連業績を事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願いします。

研究例会発表募集のお知らせ

本研究会では、毎年度3回（6月頃、12月頃、3月頃）に研究例会を実施しています。研究例会での発表を希望される方は、次の各項を明記して、別記の事務局までお申し込みください。

- 氏名（所属）
- 連絡先（住所、電話、メールアドレス等）
- 発表題目
- 発表要旨（200字程度）
- 発表時間（通常質疑応答を含め1件1時間程度）
- 発表希望場所（例：関東、関西）

昔の帝大図書館（続）－その閲覧・貸出サービス－

田澤 恭二

私は本誌第 88 号に「昔の帝大図書館－その休館日と開館時間－」と題する小文を掲載して頂いた。これは、手元にあった、戦前（20 世紀初め）の京都及び東京の帝大図書館関係の資料を基にしたものであった。幸い、何人かの先輩・友人の目に留まり、さらに続編を書くようにとの、励ましの言葉を頂いたりした。そこで今回は、前回の資料にさらに若干を加えて、当時の両帝大図書館の閲覧・貸出サービスに状況を、簡単に説明したい。言うまでもなく、閲覧・貸出サービスは図書館サービスの原点であるが、官僚制の末端に連なっていた戦前の帝大図書館では、サービスという観念は存在せず、閲覧・貸出は一種の恩恵であったようである。しかしその中でも、旧制高校卒業生だけを入学させた保守的な東大にくらべて、旧制専門学校卒業生も入学させたように比較的リベラルであった京大の方が、閲覧・貸出サービスの点でも進んでいたことは確かである。

1 京都帝国大学附属図書館の状況

『京都帝国大学附属図書館規則 附同執行手續』（明治 37 年）と『京都帝国大学図書館案内』（明治 41 年）によって説明する。

A 館内閲覧

閲覧冊数は、一時に 7 部 15 冊以内となっている。和漢書については、3 冊をもって洋装 1 冊と数えると規定している。館外貸出と異なって、利用者の身分による差別は記されていない。この規定は、学生にとっては、かなり緩やかな、歓迎すべきものだったと言えよう。

B 館外貸出

ここでは、徹底的な身分による差別があった。但し、学生に対しては、授業期間中の教科書貸出を行っていた。また、学内の公用貸出は、期間・冊数の制限が無かった。さらに、諸官庁・公共団体への公用貸出も行っていた。

① 貸出期間

職員 1 年間

学生 30 日間（但し夏季休業中の特別貸出を除く）

② 貸出冊数

教授・助教授・講師 30 冊以内

事務官・学生監・司書官・薬局長・技師 20 冊以内

司書・技手・助手・副手・薬剤手・大学院学生 10 冊以内

書記・学生 5 冊以内

雇員・傭人 3 冊以内

これは当時の身分制度を、数字の上ではっきり反映している規定と言えよう。しかし、これらの数字の根拠・由来については不明である。なお説明を加えると、当時の事務官は現在の事務局長または部課長の役職者に、学生監・司書官はそれぞれ学生部

次長・図書館事務（部）長に相当するようである。さらに、司書は図書館業務担当主任、書記は事務担当主任、雇員は一般職員、傭人は見習職員・守衛・用務員などに相当した職種と思われる。

C 書庫内検索

次の者は、書庫内に入って図書の検索が許されていた。

教授・助教授・講師

事務官・学生監・薬局長・技師

大学院学生

当該分科大学長ノ保認證ヲ有スル学生

技手・助手・副手などよりも大学院学生が優遇されていた点に、多少奇異の感を受けるが、条件付きながら学部学生への入庫検索を認めている点は評価したい。

因みに、『京都帝国大学図書館案内』によれば、当時の京大図書館の職員数は合計22名で、その内訳は次のようであった。

司書官〈事務長〉	1名	司書〈主任〉	5名
書記〈庶務会計担当主任〉	1名	雇員〈掛員〉	7名
傭人（見習・小使）〈掛員〉	7名	嘱託〈目録編纂〉	1名

そして、閲覧業務は閲覧掛6名が昼夜交代して担当し、見習・小使各1名が夜勤居残り（宿直も？）を担当したと記してある。

2 東京帝国大学附属図書館の状況

明治末期の京大図書館に対して、30年後の東大図書館での、閲覧・貸出サービスの状況はどうであったか。『東京帝国大学附属図書館利用案内』（昭和8年、12年、14年）によって説明するが、この『案内』は驚くべき“無い無いづくし”の『案内』であった。学生用に作られたと思われるこの『利用者案内』には、建物を寄付したロックフェラー財団に申し訳ないような、何とも貧弱なサービスしか記述されていない。東大図書館の当時の閉鎖的性格が示されている。

A 館内閲覧

不思議なことに、閲覧冊数についての制限規定は載っていない。ただ「一時に数部の図書を借用」する事は「なるべく遠慮して貰いたい」とあるだけである。利用者の要求の強さによって、適当に増やしていたのだろうか。いわゆる「利用規則」は無かったのだろうか。驚くべき記述である。僅かに、現在の開架図書に当たる「自由取出図書」が、一般閲覧室・指定書閲覧室・自由閲覧室に、それぞれ若干冊数備え付けてあったようである。

B 館外貸出

館外貸出については全く触れていない。教員への館外貸出は行っていたと思うのだが、京大図書館に比べて、実に不親切な状況であった事は確かだ。

C 書庫内検索

これについても、全く触れていない。教員・大学院生へは書庫内検索を許していたと思われるので、これも学部学生への軽視の現れであろう。

以上で、簡単ではあるが、説明を終わりたい。

(2004.7.7)

藤島隆『北海道図書館史新聞資料集成 明治・大正期』で調べる

書評に代えて

奥泉 和久（横浜女子短期大学図書館）

少し前のことになるが、『市立図書館と其事業』という東京市立図書館の館報について調べたことがある（拙著『市立図書館と其事業』の成立と展開『図書館界』52(3)、2000.9）。あるとき石井敦氏から、この館報による地方への影響についても言及すべきだったのではないかなどの指摘を受けた。そのときには市立小樽図書館や静岡県立葵文庫が『市立図書館と其事業』に模して、館報の名称に「其事業」を付したことを確認した程度で、その後関心が途切れていた。そのようなことがあったので、この本を手にしたときに、小樽がなぜ『小樽図書館と其事業』（1926.10 創刊）というタイトルをつけたのか、影響関係がわかるかもしれないと思った。

藤島隆『北海道図書館史新聞資料集成 明治・大正期』には、北海道内の図書館とその周辺に関する明治・大正期から昭和の一時期までの新聞記事が収録されていて、新しく版が生まれ、巻末には詳細な索引も整備されている。図書館史に関する「新聞集成」には、先に石井敦監修『新聞集成 図書館』（大空社 1992）があるが、一地域に関する図書館関係の記事が編成されたものとしてはおそらくはじめてのものではないだろうか。研究・調査への関心を触発される研究者は少なくないはずである（とくに函館とは遠隔地の）。

さて、ひとたび途切れた関心を呼び起こし、『市立図書館と其事業』の創刊の頃、1921（大正 10）年頃の小樽図書館に関する記事から当ることにする。すると、新館の開館間近の記事（「小樽新聞」大 12.12.17（以下断りのないものは同紙、掲載年は同書の表記のとおり元号で統一））につづいて、小樽市教育主任によって「図書館に就て」という連載記事が見える（大 13.3.2-3.16）。小樽図書館の創設から県立山口、東京市立日比谷、さらには欧米の図書館の様子を伝える。新聞雑誌室へは下足で入室ができ、閲覧の手続きも簡易なものとし、全面開架を視野に入れた運営が述べられている。

ところで、小樽図書館の設立は、「御大典記念事業」の一環として提案され市立図書館として発足するのであるが、じつはその前から教育会が熱心に図書館の設立運動を進めていたようだ（明 32.7.11「北海道毎日新聞」）。教育会には創設委員会までつくられた（明 45.2.10「小樽新聞」など）。その上、資金の調達、敷地の確保まで話が順調に進んでいた（明 45.6.13）。そうした経緯がありながら「御大典記念事業」に公立図書館として小樽図書館の設立が議会で発案された（大 4.1.23）。教育会との関係がうまくいかず、一旦は廃案となるが（大 4.1.24）、どうにか小樽に図書館ができることになった（大 4.4.28）、ということがこの「新聞資料集成」の記事を追っていくとわかる。

そこで、小樽図書館の開設のために、（北海道帝国大学）農科大学渡邊教授を介して、日比谷図書館から田添という司書が呼び寄せられることになる（大 5.4.15）。田

添は、設立の準備から小樽図書館の運営に参画することになり、資料の収集、整理を急ぐ。分類は8門分類が用いられた。

この一連の新聞記事からすれば、田添がおそらくはその後日比谷とは行き来があり、後年『小樽図書館と其事業』の発行に及んだものと推察しうる。この館報は、「市民に応じた又応じなければならぬ図書を市民に呼びかけるところに図書館本来の声明が存」し、それが「市民に近づく第一歩を踏まんとする姿勢」（『小樽図書館と其事業』1、1926.10）だとする。同館報によれば「図書及図書館に関する事項の質問相談に応」じるとの案内がなされ、その後同館では「館内ニ相談係ヲ設ケ」（同前 3、1927.1）るに至る。

ただでさえ新聞記事を採録するには多くの労苦を伴う。網羅的な収集をめざすとなれば、ある館の欠号を別の館の資料で補わなければならない。明治・大正期、昭和戦前期の原紙ともなれば劣化が著しく、破損箇所も少なくないはずである。かといってマイクロフィルムは、活字が潰れ、不鮮明なところを何回も読んだりしなければならず、複写をしたところで、後に同様の作業を伴う。それ以上に新聞記事は、その性格上から、いつ、どのようなかたちで研究などに反映されるのか、記事に接しているときには想像がつかないことが少なくない。労は多く、益を期待してできる作業ではない。

さらにこの本は、記事をそのまま写真製版したものではなく、新たに版を組み替えてある。復刻版に何倍する、あるいはそれ以上の作業を費やしたのではないか。そのおかげで読者には便利で読みやすい紙面構成となっている。索引も同書の活用を促すにちがいない。

最後に、ところどころ版の組み方に不規則なところが見られること、「総索引」の表記に工夫の余地があったのではないかとの感想をもった。たとえば「小樽教育会図書館」とあるが、結局この図書館はつくられなかったのであり、事情を知らない読者に誤解を与えるか。「開館時間延長」はあるが「貸出」（もしくは「館外貸出」「帯出」）、「開架」などの用語は採録されていない。ただし、索引を活用すれば、「田添」司書は他の記事から田添三喜太であること、また田添を呼び寄せた「渡邊教授」とは、1911年に日比谷図書館（開館時に同館主事（館長に相当））から東北帝国大学教授（後に北海道帝国大学）に転出した渡邊又次郎のことであり（大 5.7.30）、渡邊は小樽図書館の設計を任せられ（大 4.9.26）、顧問をつとめていたこともわかる（大 6.7.26）。いずれにしても「総索引」の意義は大きいのだが。

本文は、明治期（12-45年）、大正期（元-15年）、昭和期（2-44年）の新聞記事が収録され、「附録」に1 函館図書館関係新聞記事目録、2 樺太地方公共図書館関係新聞記事目録が付されている。

藤島隆『北海道図書館史新聞資料集成 明治・大正期』北海道出版企画センター
 一2003.11 364p ISBN 4-8328-0312-3 本体価格 3,500円

運営委員会通信

■■ 次回運営委員会のお知らせ ■■

次回運営委員会を、下記のように開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。

当日ご都合の悪い方は、別記事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

記

- 日 時 12月11日(土) 16時～17時30分
- 場 所 明治大学 アカデミーコモン8階 A-9会議室
- 内 容
 1. 2004年度研究集会・総会決算について
 2. 2004年度第3回研究例会について
 3. 2005-2007年度運営体制について
 4. 2005年度研究集会・総会について
 5. 25周年記念事業について

ほか

■■ 前回運営委員会の報告 ■■

実施日：2004年9月12日
場所：京都精華大学

以下のような事項について、協議しました。

1. 『図書館文化史研究』第21・22号について
2. 2004年度研究集会について
3. 『ニューズレター』第90号について
4. 2004年第2回研究例会について
5. 2005-2007年度運営体制について
6. 25周年記念事業について
7. 会員動向
8. 次回運営委員会について

事務局だより

■■ 会費納入のお願い ■■

2003・2004 年度会費をまだ納入されていない方には、封筒に「会費振替用紙在中」の朱印を捺し、振替用紙と会費納入のお願いの文書を同封しました。至急ご送金ください。年会費は 3,000 円です。

■■ 会員動向 ■■

新入会